

私たちの町の文化財

■第12話 金光寺跡板碑（こんこうじあといたび）

今回は独鈷山西麓に佇む板碑について紹介します。

板碑は安山岩の自然石を使用し、月輪（がちりん）の中に梵字で大きく「キリーク」と刻まれています。「キリーク」は阿弥陀如来を表す梵字です。梵字向かって右側は、「小門末流大僧都法印豪淳」ほか、権大僧都法印豪源、豪誉、豪意など僧侶の名が17名刻まれています。その下には、やや大きく「七分全得」の字が確認できます。「七分全得」とは、死者に対して供養をした場合、供養した人が受ける功德は、功德を七分として六分を受け、残る一分は死者が受けません。つまり、あらかじめ自分に対して供養をすることで、残る死者の一分の功德も受けることができるため、こうした「逆修供養」と呼ばれる思想が生まれました。今回の板碑には、「永禄十年（1567）」8月の記年銘があり、この時代には「七分全得」が浸透していたことがわかります。この他、板碑の下部には約100名にも及ぶ法名が刻まれており、造立に多くの人に関わったことが見て取れます。最後に、金光寺については、文献記録が無く詳細は不明ですが、板碑に刻まれた年代から、江戸時代より前には存在し、刻まれた僧侶の名に「豪」と付く人物が多いことから、天台宗の寺院であったと推測されます。

熊本市文化振興課 藤島 志考氏

池上の地辺寺は平安時代、独鈷山西麓の金光寺の板碑は室町時代末期と時代は違うけど、宗派は同じ天台宗。密教の法具である独鈷の名前が地名として付けられた事自体、この地域の歴史が垣間見える。

